

## 「山巔毛(さんていんもー)と白銀堂」 沖縄県糸満市

かつて糸満の漁夫は、わずか数メートルの小さなサバニを駆使し遠く南洋、インド洋にまで出漁したことで有名である。その糸満漁港の近くの丘に「白銀堂」がある。ここに漁師と薩摩の侍の伝説が伝わっている。長引く悪天候による不漁で、生活も苦しくなるばかりの漁師は、借金先の薩摩武士が取り立てにやってくるのを見ると、家から逃げ出し海岸の岩穴へ隠れるが、見つかってしまう。居留守に激怒し切り捨てようとする侍に、漁師は、震えながら大刀を握る手にすがりつき、あと一年待ってくれるように懇願する。しかし、侍は聞き入れない。



山巔毛

そこで漁師は破れかぶれになって、「意地ぬ、いじら一手引き、手ぬ、いじら一、意地引き(意地が出そうになったら手を引き、手が出そうになったら意地を引け)」という沖縄のことわざを教えた。すると、それまで激怒していた侍であったが、何か道理のかなったものを感じ、刀を鞘に収め、来年は必ず返済するように言い残しその場を立ち去った。

侍は沖縄での仕事を終え、薩摩の我が家へ真夜中に帰ってきた。家族はとうに寝入っており、暗闇の中を寝所へ入ると、妻が他の男と添い寝していた。侍は怒り心頭して、妻を切り捨てようと刀を抜き、大上段に振りかざしたその瞬間、あの漁師の言葉が蘇った。よくよく聞けば、それは侍の留守中、女だけの暮らしぶりでは無用心と考え、侍の母が男装していたものであった。これを知つ

た侍は、漁師の言葉に感謝した。

一年後、母と妻の恩人に金の取立てはできぬ、と侍は漁師に借金の帳消しを申し出るが、今度は漁師が借りたものは返すと納得しない。押し問答が続き、最後にはお互いの強情を笑い合った。そして侍は、お金を漁師が隠れていた岩穴に埋めようと提案し、漁師も同意した。

後の人々はここを聖地として神社を建立し、糸満の繁栄を祈願する守護神となったという。



白銀堂

### みどころ



- 糸満市公設市場：山巔毛をくだると糸満ハーレーの行われる糸満漁港があり、そのすぐ向かいに立地。市場内は、スーパーでは味わえない独特の雰囲気がある。新鮮な魚や肉、野菜、花、惣菜など多種多様な物が売られており、旧正月前にもなると多くの人々にぎわう。